OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪大学文学部国文学研究室蔵 後鳥羽院御集（翻刻）三
Author(s)	山本, 一; 佐藤, 明浩
Citation	語文. 1986, 47, p. 47-66
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68746
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学文学部国文学研究室蔵

後鳥羽院御集（翻刻）三

山本一・佐藤明浩

後鳥羽院御百首（注1）

春　二十首

立春

一〇九七　春たつとおもひあへぬにのとけきはいつる朝日や空にしるらん

霞

一〇九八　をしなへてかすむやいつこあまつ空めにはさやかにみえぬ春哉

一〇九九　和田の原行ゑもしらすはてもなしおきつ霞の春の明ほの

鶯

一一〇〇　野へちかく年の内より家ゐしてまつうくひすの声を聞かな

春雪　」62オ

一一〇一　風ふけはふるあは雪のそらにのみきえてみたるゝ春の夕くれ

若菜

一一〇二　白妙に袖ふりはへてこよろきやめさしも春といそなつむ也

梅

一一〇三　八重にたつかすみの袖はつゝめ共かくれぬ物とにほふ梅かえ

一一〇四　梅か香をしるへにはしてしり知すなにゝあやなくやとはわくへき

春月

一一〇五　春の夜の月のかつらもかすみつゝあたりそ匂ふ花やさくらん

柳

一一〇六　春風の吹くることにしろたへのいさこをはらふ青柳の糸」62ウ

帰雁

一一〇七　行なるゝ故郷なれはかへるかりくるゝ雲ちもまよひやはする

春雨

一一〇八　なかき日をふりくらしたる春雨はさひしきことのかきり也けり

花

一一〇九　松かえの千とせの後もなをあかしときはに花のさく世也せは

一一一〇　色まかふ雲なへたてそはなのあたり見つゝしのはんみよし野の山

一一一一　山さくらはれさく花に物そおもふよしの〻嵐吹そめしより（本ノ）

一一一二　たれかこの雪と月とにたくへけんなへてにもあらぬ花の色香を

一一一三　つれなさや契かはしてのこりけん花ちるころのあり明の月」（63オ）

藤

一一一四　さきかゝるみ山の藤のこむらさきあをはの中にめつらしき哉

款冬

一一一五　花さけはみなそこてりて足引の山ふきにほふせゝのしら波

暮春

一一一六　いつとてもおしむにとまる春はなきをしゐてしたふそつれなかりける

夏十首

卯花

一一一七　我宿のかきねつゝきを河とみておられぬ波はさけるうの花

郭公」（63ウ）

一一一八　ほとゝきすいく声なきつ大はらやをしほの山のむら雨の空

一一一九　なきすてゝ過つる方をみせしとや雲に入ぬるほとゝきすかな

一一二〇　白雲の道ゆきふりのほとゝきすたかことつての事かたらなん

夏月

一一二一　白妙のいさこの霜のをきゐつゝ月みるほとはすゝしかりけり

五月雨

一一二二　ほす衣くちははてしな河やしろかはせにいはふ五月雨の比

盧橘

一一二三　むら雨は花たちはなを過ぬらしつねよりことに露のしけきは

螢」（64オ）

一一二四　夕暮の草葉の末にとふほたる雲井にのほる影そほのめく

夕立

一一二五　なる神のこゑのとをちにぬるまゝにふりすきて行夕立の雨（本ノ）

納涼

一一二六　山ふかきふしみの里のゆふすゝみ松のかけには夏なかりけり

秋二十首

初秋

一一二七　いとはやとすゝしきかせかをとめこか袖ふる山に秋たつらしも

七夕

一一二八　七夕はおほくの秋やかさぬらん逢夜は年に一夜なれ共」（64ウ）

露

一一二九　なかめ侘て涙よりをく露になをつゆそふ袖の秋の夕くれ

萩

一一三〇　とふ人を待とせしまの日数へて下葉もみつる秋はきの花

荻

一一三一　故郷の露のやとりもあとたえてみぬ日にしける庭の荻はら

薄

一一三二　白露のをかへの薄はつをはなほのかになひく時はきにけり

秋夕

一一三三　秋はたゝ身にさむく吹風の音もなけかんための夕くれの空」65オ

虫

一一三四　露しけき尾花にましり鳴虫はほにいでゝ恋や忍ひかねつる

鹿

一一三五　秋ふかきとこのよさむにね覚して鹿のね聞そさひしかりける

初雁

一一三六　秋風のさむき朝けにきにけらし雲にきこゆる初かりの声

月

一一三七　あき風は尾上の松にをとつれて夕の山をいつる月かけ

一一三八　いとゝなを月すめとての嵐かなのこる雲なきあきの大空

一一三九　なかめつゝ人たのめなる秋の夜の月のひかりにいこそねられね」65ウ

一一四〇　さらしなやをはすて山もさもあらはあれたゝ我宿の雲の上の月

一一四一　よこ雲のあくる外山をよそにみて月はよふかき物ぞ　西の空哉

擣衣

一一四二　今よりは衣うつなり秋かせのさむき夕のをかのへのさと

霧

一一四三　誰ならんさきにたつこまの音はして霧にこめたる勢多の長はし

紅葉

一一四四　なかれ行末はとまらすたつた川もみちのかけをあらふ白波

一一四五　しくるらし紅葉の錦しきしまの山とりの尾のなか月の空

九月尽」66オ本ノ

一一四六　暁のかねまつ程のうきのまを秋とおもふそかなしかりける

冬十首

初冬

一一四七　冬といへはいつしか野へも霜かれてのこる物とは白菊の花

時雨

一一四八　嶺ちかきいり日の空のしくるれは紅葉を松の木末にそかる

落葉

一一四九　竜田川よもの木の葉のしくれの雨まなくしふれと水はまさらす

冬月

一一五〇　なかめわひぬふかき霜夜のあけかたは月もむなしきかきり也けり」66ウ

霰

一一五一　あらし吹ならのひろ葉の冬枯にたまらぬ玉はあられ也けり

雪

一一五二　いとゝまた冬こもりせるみよしのゝ芳野のおくの雪のふる里

一一五三　こほりつる此ゆふくれの雲ならし暁かけてふれるしらゆき

一一五四　かきくらし降つる雪のはるゝ夜に千里をみせてみかく月かけ

千鳥

一一五五　さえ〳〵て浦かせしきる冬の夜のなみのさはきに千鳥なく也

歳暮

一一五六　むかしへと成行としのおしさこそ花紅葉にも猶まさりけれ」67オ

恋二十首

初恋

一一五七　いひ出んことの葉もなをしのはれて心にこむる我思ひかな

忍恋

一一五八　あらはれん物ゆへやかてわすれしとうたかふかたにしのふとし月

一一五九　心より又はもらさむ(ぬイ)わかこひをなみたはしりて年ふりにけり

不逢恋

一一六〇　としふれとかはらぬ物はあはてのみつれなき中のなみた也けり

一一六一　つれなさをいのる心の末つゐにあふ夜ありやと君そしるへき

一一六二　侘ぬれは又そ恋しきつれもなき人をねたしと思ひすつれと」67ウ

一一六三　恋しなん命のうちに逢といふなき名をたにもたつときかはや

一一六四　よしさらは今そこひしとちかひしも身さへ心にえこそまかせね

待恋

一一六五　いつはりにならんゆふへの我いのちあすまてありといかゝきかれん

一一六六　こりす待契りの末のいかならんつらきになれし夕暮の空

初逢恋

一一六七　限あれは今そかさぬるせきかへし涙にくちし夜半の衣手

暁別恋

一一六八　さもあらはつれなさはかりならひきて月につらさの有明の空

逢不逢恋」68オ

一一六九　いかにせんかさねし袖のうつり香も月日つもれはうすくなりゆく

一一七〇　つれなしと恋うれ(ら歟)し世はむかしにて心うはさ(よ歟)の身をそうらむる

一一七一　くやしくそ有し別れをかきり共しらて出けん衣〳〵の空

忘恋

一一七二　契をきてわすれし人の面影はつらき物から恋しかりけり

一一七三　かれぬやと待し月日にわすれ草しけりのみして霜はむすはん

一一七四　はかなくそ一夜二夜のよかれをも身にならはすとむかしうらみし

恨恋

一一七五　わかるゝは世のならひともゆるしてんうつるにつらきひく

てあまたに

一一七六 波たかき入江の小舟こきかへりうらみて袖のぬれにける哉」68ウ

雑　二十首

暁

一一七七 寝覚するあかつきはかり世の中にこゝろすむ時は人もあらしな

松

一一七八 人ならはとはまし物を谷ふかみ苔むす松のむかしかたりを

竹

一一七九 おなしくはやを万代をゆつりなん我九重のにはのくれ竹

山

一一八〇 春は花秋はもみちのから錦たつたの山の名にこそ有けれ

河」69オ

一一八一 大井河せゝのみゆきもかさなりてふかきなかれに成にけるかな

橋

一一八二 宇治橋の末をはるかに見わたせは雲にきえ行あけほのの空

関

一一八三 会坂やのこりの月の関の戸を鳥の音きゝてこゆるたひ人

旅

一一八四 駒なむる袖まて露はかゝりけりはらはぬ草の野辺の夕くれ

一一八五 旅ねして故郷おもふ床の上にすくる時雨の音のかなしき

山家

一一八六 おとろかてなれぬる程もあはれ也なくさをしかの庭の草ふし」69ウ(注2)

此間奥ニアリ

一一八七 あらしたに露はらはなんとふ人もなき山かけのこけのまかきに

田家

一一八八 いほむすふいな葉の□(虫損、雨カンムリノ下不明)も立みちて国と民とはさかへゆかなん

述懐

一一八九 住吉の神もあはれとまもらなん心にかゝる秋(本ノマヽ)けのうらなみ

一一九〇 人としていかにか世にもありふへき五の常の道はなれては

夢

一一九一 いかにしていにしへ今の見えつらん夢のたゝちはまたさとりえす

神祇

一一九二 神風やいほす(本ノマヽ)ゝの川いまもかも清きなかれをたのむ我なり」70オ

尺教

一一九三 さとるへきそのみなもとはひとつにてさま〴〵にとく道やかはれる

祝

一一九四 松といへはいく千とせともしらなくにかはらぬ色のあかすも有哉

一一九五 天津空はれたるあさになくたつの行すゑとをき声ものとけし

（一行分空白）

七条院けふあすとも知ぬ身にいかゝしていま一度見まいらすへきと御ふみありけるを御覧して

一一九六 たらちめのきえやらて待露の身を風よりさきにいかてとはまし」70ウ

家隆卿和歌はむかしよりの面影かす〳〵にうかひてつらき命にけふにあひぬるとのみおもひわたるおり〳〵ふてにまかせてかきたるよし申侍〳〵ねさめしてきかぬをきゝてかなしきはあらいそ波のあか月のこゑなと廿はかりかきあつめて寂仏かもとへたよりにつけたりけるを御覧して」71オ

一一九七 波間なきおきのこしまの浜ひさし久しくなりぬ都へたてゝ

一一九八 あきといへは人のおもひにくもはれて月のかつらもおり忘れつゝ

一一九九 おもひやりてあはれともみよこれそこの涙の川の水くきのすゑ

二〇〇 かせさむみあさのさ衣うつたへにかきねつゝきのね覚にそ聞

二〇一 いたつらに月もなかめす物思ひの涙のうちに秋はくれにき

二〇二 木枯のおきのそま山ふきしほりあらすしほれて物思ふ比

二〇三 日にそへて涙そいとゝますかゝみかけたに見ねは身もわすれつゝ

二〇四 吹きはるたえま〳〵にきこゆなりいりあひの鐘をうつむ山かせ

二〇五 ふしわふる竹のすかきのなかき夜にしほるたもとのかすそしられぬ

二〇六 とまる名もなにかはおしき思ひ河なかるゝ水のあはれ世の中」71ウ

二〇七 水無瀬川さとの木末をかへりみてなく〳〵過し空はわすれぬ

二〇八 めくりあふ春もやあると故郷の軒端のさくら色なわすれそ

（八行分空白）」72オ

百首和歌

春 二十首

二〇九 かすみゆくたかねを出るあさ日影さすかに春の色をみる哉

二一〇 すみそめのそての氷に春たちてありしにもあらぬなかめをそする

二一一 とけにけりもみちをとちし山川の又水くゝる春のくれなゐ

二一二 百ちとりさえつる空はかはらねとわか身の春そあらたまりぬる

二一三 里人のすそ野の雪をふみ分けてたゝわかためと若菜をそつむ

二一四 ふる雪に野守か庵もあれはてゝ若菜つまんとたれにとはまし

二一五 根芹つむ野沢の水のうす氷またうちとけぬ春風そふく

二一六 かきりあれはかきねの草も春にあひぬつれなきものは苔ふかきそて」72ウ

二一七 春雨に山田のくろをゆく賤の蓑ふきみたす暮そさひしき

二一八 遠山路いくへもかすめさらすとてをちかた人のとふもなけ

れは

一二一九　うらやましなかき日影の春にあひて伊勢をのあまも袖やほすらん

一二二〇　萌いつる峯のさわらひ雪きえておりすきにける春そしらるゝ

一二二一　をのれのみ春にあふかとおもふにも嶺のさくらのいろそものうき

一二二二　なかむれは月やはありし月ならぬ（やあらぬイ）うき身そもとの春にかはれる

一二二三　なかむれはいとゝうらみもますけおふる岡辺の小田をかへす夕暮

一二二四　春雨も花のとたえそ袖にもるさくらつゝきの山のした道

一二二五　宿からむ交野のみのゝかり衣日もゆふくれの花の夕かせ

一二二六　すみそめの袖もあやなくにほふ哉花ふきみたす春の夕風」　73オ

一二二七　ちる花に瀬々の岩まやせかるらんさくらにいつる春の山河

一二二八　物おもふにすくる月日はしらねとも春やくれぬる峯の山ふき

夏　十五首

一二二九　けふとてや大宮人のかへつらんむかしかたりの夏ころも哉

一二三〇　ふるさとをしのふの軒に風すきて苔のたもとににほふ橘

一二三一　たをやめの袖うちはらふむら雨にとるやさなへの声もならはす

一二三二　くれかゝる山田のさなへ雨すきてとりあへすなく郭公かな

一二三三　あやめふく萱か軒はに風すきてしとろにおつるむら雨の露

一二三四　五月雨に池の汀やまさるらん蓮のうき葉をこゆるしら浪

一二三五　さみたれに宮木もいまやくたすらん松たつ峯にかゝるむら雲」　73ウ

一二三六　難波江やあまのたく縄もえ侘てけふりにしめる五月雨の比

一二三七　したくゆるむかひの森の蚊遣火におもひもえそひゆく螢かな

一二三八　あはれにもほのかにたゝく水鶏かな老のねさめのあかつきの空

一二三九　ゆふたちのはれ行峯の雲まより入日すゝしき露の玉さゝ

一二四〇　夕すゝみ芦の葉みたれよる浪にほたるかすそふあまのいさり火

一二四一　くれ竹の葉末かたよりふる雨にあつさひまあるみな月の比

一二四二　見るからにかたへすゝしき夏ころも日も夕露のやまとなてしこ

一二四三　いまはとてそむきはてつる世中を何とかたらふ山ほとゝきす

秋　二十首

一二四四　かたしきの苺の衣のうすけれは朝けの風も袖にたまらす」　74オ

一二四五　よのつねの草葉の露にしほれつゝものおもふ秋とたれかいひけん

一二四六　おもひやれ真柴のとほそをし明てひとりなかむる秋のゆふへを

一二四七　秋されはいとゝ思ひをましはかるこのさと人もそてや露けき

一二四八　さきかゝる山下みちもまよふまて玉ぬきみたる萩のあさつゆ

一二四九　故郷を別路に生る葛の葉の風はふけともかへるよもなし

一二五〇　いかにせん葛はふ松の時のまもうらみてふかぬ秋風そなき

一二五一　なきまさるわかなみたにやいろかはるものおもふやとの庭のむらはき

一二五二　軒はあれてたれかみなせのやとの月すみこしまゝの色はかはらす

一二五三　おもひやれいとゞなみたもふる郷のあれたる庭の秋のしら露

一二五四　野辺そむる雁のなみたは色もなしものおもふ露のおきの里には」74ウ

一二五五　ふるさとの一むらすゝきいかはかりしけき野はらと虫のなくらん

一二五六　あはれなりたかつらさとて初かりのねさめの床になみたそふらん

一二五七　はれよかしうき名を我にわきも子かかつらき山のみねのあさ霧

一二五八　岡の辺の木のまに見ゆる槇の戸にたえ〳〵かゝる蔦のあきかせ

一二五九　おなしくは桐の落葉もふりしけよはらふ人なき秋のまかきに

一二六〇　ぬれてほす山路の菊もあるものをこけのころもはかはくまそなき

一二六一　たのみこし人のこゝろは秋ふけて蓬かそまにうつらなくなり

一二六二　山もとのさとのしるへのうすもみちよそにもおしき夕あらしかな

一二六三　よもすからなくや浅茅のきり〳〵すはかなくくるゝ秋をうらみて

冬　十五首」75オ

一二六四　見し世にもあらぬたもとを哀とやをのれしほれてとふ時雨哉

一二六五　冬くれは庭のよもきも下もえてかれ葉のうへに月そさひゆく

一二六六　霜かれの尾花ふみ分ゆく鹿のこゑこそきかねあとはみえけり

一二六七　神無月しくれとひわけゆくかりのつはさふきほす嶺の木からし

一二六八　をのつからとふかほなりし萩(ママ)の葉もかれ〳〵にふく風のさむけさ

一二六九　去年よりは庭の紅葉のふかきかなみたやいとゞしくれそふらん

一二七〇　青むとてうらみし山もほともなく又霜かれの風おろすなり

一二七一　竜田川まかふ木のはのゆかりとてゆふつけ鳥に木からしの風

一二七二　ちりしけるにしきはこれもたえぬへしもみちふみわけかへる山人

一二七三　冬こもりさひしさおもふあさな〳〵つま木のみちをうつむ白雪」75ウ

一二七四　山かせのつもれはやかてふきたてゝふれとたまらぬ嶺の白雪

一二七五　さなからやほとけの花のおらせましきみのえたにつもる白雪

一二七六　かそふれはことしの暮はしらるれと雪かくほとのいとなみもなし

雑三十首

一二七七　いにしへのちきりもむなし。よしや我かたそきの神とたのめと

一二七八　なましひにいけれはうれし露の命あらは逢世をまつとなけれと

一二七九　とへかしな雲のうへよりこし雁のひとり友なき浦になく音を

一二八〇　もしほやく海士のたく縄打はへてくるしとたにもいふかたそなき

一二八一　かもめなく入江のしほやみつなへに芦のうき葉をあらふ白波

一二八二　浪まわけおきの湊に入船のわれそこかるゝたえぬ思ひに」

一二八三　汐風にこゝろもいとゞみたれ芦のほに出てなけととふ人もなし

一二八四　里とをききねか神楽の声すみてをのれと更る窓のともし火

一二八五　とはるゝもうれしくもなしこの海をわたらぬ人のなけのなさけは

一二八六　なかき夜を中〳〵あかすともとてやゆふつけ鳥の声そまちかき

一二八七　あかつきの夢をはかなみまとろめはいやはかなゝる松かせそ吹

一二八八　とにかくにつらきは沖の島つ鳥うきをはなれる名にやこたへん

一二八九　すきにけるとし月さへそうらめしきいましもかゝるもの思ふ身は

一二九〇　夕月夜入江にしほやみちぬらんあしのうき葉のたつのもろ声

一二九一　沖のうみをひとりやきつるさよ千鳥なく音にまかふ磯の松風

一二九二　日にそへてしけりそまさる青つゝらくる人もなきまきの板戸に」

一二九三　なにとなきむかしかたりに袖ぬれてひとりぬるよもつらき鐘哉

一二九四　人こゝろうしともいはしむかしより車をくたくみちにたとへき

一二九五　みほのうらを月とともにや出つらんおきの外山にふくるかりかね

一二九六　よそふへきむろの八島もとをけれはおもひのけふりいかてまかへん

一二九七　はれやらぬ身のうき雲をいとふまにわかよの月のかけそふけぬる

一二九八　うしとたに岩波たかきよし野河よしや世中おもひすてゝき

一二九九　ことつてんみやこまてもしさそはれはあなしの風にまかふ

むら雲

一三〇〇　とにかくに人のこゝろのみえはてぬうきや野守のかゝみなるらん

一三〇一　おもふ人まつもこゝろのなくさむとみやこ鳥たにあらはとはまし

一三〇二　ふるさとに苔の岩はしいかはかりをのれあれても恋わたるらん」77オ

一三〇三　われこそは新島守よおきの海のあらきなみかせ心してふけ

一三〇四　かきりあれはかやか軒はの月もみつしらぬは人の行末の空

一三〇五　おなし世に又住の江の月やみん今こそよその沖津島もり

一三〇六　なひかすは又やは神にたむくへきおもへはかなし和歌のうら浪

一三〇七　とへかしな大みや人のなさけあらはさすかに玉のたえもやらぬを

（五行分空白）」77ウ

（裏表紙見返シ左上ニ「読合畢」、左下ニ貼紙「墨付七十七枚」）

（以上上冊）

後鳥羽御集　下（題簽）

（遊紙一枚）

老若五十首御歌合　建仁元年二月

建仁元年九月五十首御会

元久元年十二月八幡三十首御会

同月賀茂上社卅首御会

賀茂下社卅首御会

同月住吉卅首御会

同二年三月日吉卅首御会

承元二年二月内宮卅首御会

同外宮卅首御会

最勝四天王院御障子和歌　承元元年十一月」1オ

建暦二年十二月二十首御会　五人百首中

正治二年七月北面御歌合三首

同七月十八日御歌合三首

同八月朔日新宮御歌合三首

同九月御歌合十首

同九月尽日御歌合三首当座

同十月一日御歌合三首当座

同日御歌会二首当座

同十一月十一日新宮御歌合五首当座

同十月七日新宮御歌合三首」1ウ

同十一月八日影供御歌合三首

同十一月廿九日御幸住吉社三首御熊野詣次

同十二月御歌合三首

建仁元年正月十八日影供御歌合三首

同三月十八日影供御歌合六首

同三月尽日新宮撰歌合十首

同四月廿六日御会一首鳥羽殿初度

同四月晦日影供御歌合三首

同日当座御会二首

同五月日城南寺御歌合三首」2オ

同七月廿七日当座御会一首和歌所
同八月三日影供御歌合六首和歌所　初度
同月十五夜撰歌合九首
同夜当座御会　和歌九品三首
同十二月二日影供御歌合三首隠名
同十二月廿八日石清水社御歌合三首
同二年正月十三日御会三首和歌所
同二月十日影供御歌合三首
同三月廿二日三躰和歌六首
同三月同日当座御会四首」2ウ
同五月影供御歌合三首
同六月水無瀬釣殿御歌合六首
同八月十五夜三首
同八月廿日影供御歌合三首
同九月廿九日恋十五首撰歌合
同九月十三夜御会三首当座
同夜当座御会二首折句十三夜　隠題水無瀬川
同三年正月十五日御会一首高陽院殿
同六月十六日影供御歌合三首
同六月十六日影供之次二首」3オ
同七月五日八幡宮撰歌合六首
同八月十五夜和歌所当座五首
同十一月釈阿九十賀御会同屏風御歌十三首
同月日六首和歌所
元久元年七月十六日御会五首　宇治御幸
同八月十五夜御会五首　五辻殿初度
同夜当座御会一首
同十月石清水御歌合三首当座　北野社歌合之由被注付尤不審
同十月日当座御歌合三首
同十一月十三日春日社御歌合三首」3ウ
新古今竟宴和歌一首　元久二年三月廿六日
同七月十八日北野御歌合三首　祈雨当日出題　摂政判有序
建永元年正月十一日御会一首　高陽院
同七月廿五日卿相侍臣御歌合三首
同日当座御歌合三首
同月中後日当座御歌合三首
同八月五日鳥羽院新御所初度一首
同八月御歌合式（ママ）御会三首
承元々年正月廿二日御会一首和歌所」4オ
同三月七日鴨社御歌合三首
同日賀茂社御歌合三首
同二年三月住吉御歌合三首
同閏四月四日三首
同四年八月十一日一首
同九月粟田宮御歌合三首
建暦二年二月廿五日於紫宸殿花下三首
同三年七月十七日松尾社御歌合三首無判
建保元年十二月十四日御会五首　水無瀬殿当座
同二年二月御会三首」4ウ

同八月撰歌合十首
同九月三日当座二首
同九月十四日一首
同三年六月二日御歌合五首
同四年八月廿日五首御熊野詣路次
　当座和歌湯浅宿
同十月十一日庚申嵯峨殿一首
同五年四月十四日庚申御会五首
同七年三月八日御会一首水無瀬殿
撰歌合十番嘉禄二年四月廿一日家隆卿賜之」5オ
判進云々
建仁元年九月十三夜影供御歌合三首
詩歌合一首
嘉禎二年七月遠島御歌合十首
建仁元年十月熊野御幸所々御歌十八首
熊野路次御歌合三首
正治二年十一月八日影供御歌合一首
贈答御歌六首
題不知御歌卅一首
（二行分空白）」5ウ
後鳥羽院御家集下
建仁元年二月老若五十首御歌合十六十八両日有評定
被付勝負
　春
一三〇八　春は今冬をこめてやたちぬらん霞にもるゝみねのまつ風
一三〇九　朝霞たてる山辺そなをさゆる木のめも春の雪はふりつゝ
一三一〇　わたの原遠の霞のはるのいろに（波イ）八十島かけてかへる雁金
一三一一　武蔵野のきゝすよいかにこや思ふ煙のやみにこゑまよふ也
一三一二　都人（新続古）そこともいはすうちむれて花にやとかるしかの夕暮
一三一三　花匂ふかすみの空をなかむれはおほろけならぬ春のみか月
一三一四　あたら夜のまやのまや（ママ）のあまりに詠れは桜にくもる有明の
（続後撰）
月」6オ
一三一五　花ゆへにしかの故郷けふみれはむかしをかけてはるかせそ
（続千）
吹
一三一六　分てこの吉野のはなのおしきかはなへてそつらき春の山風
一三一七　おもふとも明なん空はいかゝせん夜のまはおしめ春つくる
かね
　夏
一三一八　み渡せは名残はしはしかすめとも春にはあらぬ（空イ）けさの明ほ
の
一三一九　久方の月のかつらにあふひ草かけてそたのむかもの川なみ
一三二〇　郭公くもるこよひのむら雨にまたしき声やよにふりぬらん
一三二一　あやめ草岩かき沼のねをたえすけふは秋のにほひとそなる
一三二二　時鳥軒のたち花にほふかにえや忍はれぬをちかへる声
一三二三　郭公おもひもわかぬ一こゑにあけぬるかたはしのゝめの
月」6ウ
一三二四　夏の月しはしみるまもあらはこそくもらはくもれ山のはの
空
一三二五　時鳥雲のはつかにきこゆなりよとのわたりのむらさめの空
一三二六　秋ちかきしつかきねの草むらに何ともしらぬ虫の声哉
一三二七　夏もまたをしまかいそのかち枕うきねの波に秋かせそ立
　秋

一三二八　秋立てけふみかの原かせさむしやゝたなはたにころもかせ
山
一三二九　荻の葉にあきかせ吹ぬともすれはかはらぬ月の影そすゝし
き
一三三〇　秋風は身にしむ物とおきの葉に吹よりこそはならひそめし
か
一三三一　住吉の松にあきかせ小夜ふけてうらよりをちに月そさやけ
き
一三三二　おきの葉にをく白露の玉ゆらも聞しのふへき秋のかせかは」7オ
一三三三　秋の色はまた一しほの紅葉はに心してふけ山おろしのかせ
一三三四　あきやとき時雨やをそき三室山染ぬこすゑにあらし吹也
一三三五　くれて行秋の名残はおほあらきの森のこすゑに有明の月
一三三六　長月や秋の末葉に霜をけはのはらの小萩かれまくもおし
一三三七　尋みよいかなるせきの関守かつれなくくるゝ秋をとゝむる
冬
一三三八　津の国のこやもあらはに霜かれて八へふく軒にしくれふる
也
一三三九　此比はさ夜の時雨もきゝわかす木のはになるゝみ山への里
一三四〇　冬に猶かさねて空のかせさえて時雨にかはるみねのしら雪
一三四一　ときはなる松のみとりを吹かねてむなしき枝にかへる木か
らし」7ウ
一三四二　見わたせは浪こす山のすゑの松こすゑにやとる冬の夜の月
一三四三　から崎や氷に浪のをとたえてみきはに残るさ夜の松風
一三四四　高さこのまつふく風そむもれゆく尾上の雪やふりまさるら
ん
一三四五　すまのうらにことそともなき煙かな雪のあしたのあまのも
しほ火
一三四六　冬ふかみとやまのあらしさえ〳〵てすそのゝまさき霰降也
一三四七　西のうみのあら磯浪による竹の一夜になりぬ冬の日影も
雑
一三四八　心をしもイあまてる神にかけまくもかしこき光くもりなき世に
一三四九　淡路島はイふきかふすまのうら風にいくよのちとり声かよふら
ん
一三五〇　おしめともつれなくあけぬ夜はの月名残を山のはには残し
て」8オ
一三五一　とひもこぬ人の心を三輪の山しるしの杉の名こそおしけれ
一三五二　なかむれは松の木影にほの〳〵とあくるもつらきうら島の
月
一三五三　浜ひさし浪のまに〳〵なかむれはみゆるこしまに有明の月
一三五四　呉竹のふしもさためすねもいらす鳥のなくまて月をこそみ
れ
一三五五　事とはんたれかはこゝに角田川名にしおふ鳥はありやなし
やと
一三五六　宮古人さひしき宿のまつかせに月をはみるかとたにとへか
し
一三五七　住吉の松はいく世と事とへは岸うつ浪そ磯にこたふる
（一行分空白）
建仁元年九月五十首御会
初春待花」8ウ

一三五八　雪きえてけふよりはるをみよしのゝ山も霞て花をまちける
山路尋花
一三五九　雲かゝる木末を花とたとりきてまたころあさきしかの山越
山花未遍
一三六〇　大方のはなかまたしき嶺の月のはれゆく空に残る白雲
朝見花
一三六一　明わたる山路の花のほしもあへす朝露なから春かせそふく
遠村花
一三六二　桜さく野辺の春かせかほるなりいさ[みに](見に)ゆかんをちの里人
故郷花」9オ
一三六三　さき残る吉野の宮のはなをみて春やむかしと誰うらむらん
田家花
一三六四　庵むすふ春の山田も時しあれはなはしろ水に花をまかせて
古寺花
一三六五　はつせ山々たちはなれちる花をゆくゑさためすさそふ風哉
花似雪
一三六六　古郷はよしのゝかせやかよふらん桜の雪もふらぬ日はなし
河辺花
一三六七　芳野川ゐせきに花をせきとめて水の心も春をみせける(のこせるイ)
深山花」9ウ
一三六八　あたら夜の吉野のおくにひとりたれ月と花との哀しるらん
暮春花
一三六九　みよしのやなけの桜を頼にてしをりもしらぬ山の夕くれ
古渓花
一三七〇　咲てちるおもひなしとも如何せん谷にも花のよそならはこそ
関路花
一三七一　ふはの山かせもとまらぬ関の屋をもるとはなしにさける花哉(たイ)
驛中花
一三七二　旅衣さらきやよひ日数へて花に馴たる袖のうへかな
湖上花」10オ
一三七三　春かせのにほてるおきをふくからに桜をよするしかのうら浪(くゝるイ)
橋下花
一三七四　岩はしの神をたのむのかりなれや桜をわけてよると鳴也
花下送日
一三七五　花のかけの旅ねのあらしよころへて月そなれ行袖の手枕(にイ)
庭上落花
一三七六　かりにたに人こそとはね故郷のさくらはゆきと庭にしけとも
暮春惜花
一三七七　いたつらに春くれにけり花のいろの移をおしむなかめせしまに(もイ)
初秋月」10ウ
一三七八　秋のきて露またなれぬ荻のはにやかてもやとる夕つくよ哉
月前草花
一三七九　月影を我身ひとつとなかむれは千々にくたくる萩の上露
雨後月
一三八〇　夜半になくかりの涙に雨すきて月にうつろふ野への色哉

松間月

一三八一　ほの〳〵と心つくしにもる月をなをふきしほる庭の松かせ

山家月

一三八二　山かけや秋ははらはぬ庭の面の桐の落葉にすめるよの月

月前竹風」11オ

一三八三　古里の月吹かせになよ竹のなよりあひてもいく夜経ぬらん

野径月

一三八四　わするなよ月にいく野〳〵道すから袖になれたる女郎花哉（ぬイ）

沢辺月

一三八五　くもりなき沢辺（こしイ野沢イ）のあしの埋水やとしもなれぬ月の影哉

月前聞雁

一三八六　をのかくる嶺の夕きりはれはて〳〵月にかすしる初雁の声

浦辺月

一三八七　あけぬへきよをしほかまの恨わひからくも月のたけにける哉

月照滝水」11ウ

一三八八　ぬきみたる滝の白糸くりはへてよるともみせぬ月の影哉

杜間月

一三八九　月残る生田の森に秋ふけて夜さむの衣夜半にうつ也

月前秋風

一三九〇　たかためとわきてはふかぬ秋かせも月みる袖の露をとひくる

江上月

一三九一　みしま江のいりえのあしのしたみたれみたれても猶月はすみけり

月前虫

一三九二　あきふけぬなけや霜夜の蚤や〳〵かけさひし（むイ）よもきふの月

月前聞鹿」12オ

一三九三　ね覚のみす〳〵のしのやに聞ゆ也月につまとふ小男鹿のこゑ

旅泊月

一三九四　船とむるむしあけの秋のはつかせにわすれかたくもすめる月哉

月前草花（露イ）

一三九五　夕露にやとして月をみや木野の小萩か風よ心してふけ

菊雛月

一三九六　白きくもうつろはんとのわさなれや霜の笆の有明の月

暮秋暁月

一三九七　秋もいなは恋しかるへきこよひかなたのめかをきし有明の月

寄雲恋」12ウ

一三九八　我恋は嵐にまよふ空の雲うきてそこともなき世也けり

寄風恋

一三九九　我袖に露はもとよりをきけるをあらはすあきの風の音哉

寄雨恋

一四〇〇　こぬ人を月に待てもなくさみきいふせきよひの雨そ〳〵き哉（ぬイ）

寄草恋

一四〇一　袖（続古）にをく露の向後をたつぬれはあはてこし夜の道のさ〳〵原

寄木恋

一四〇二　人心秋の木葉とうつろへはかはらぬまつのかせのをとかな（とイ）

寄鳥恋」13オ

一四〇三　しはしこそあけぬるかとも恨しかまたはそ今はしきのはね
かき

寄嵐恋

一四〇四　忘てはねぬへきものを何と又誰まつかせのあらくふくらん

寄船恋

一四〇五　わたのはら跡なき波のふなひともたよりの風はありとこそ
きけ（統古）

寄琴恋

一四〇六　かす〳〵に思ひし事はねにたてしかよふ松かせはいかに吹
とも

寄衣恋

一四〇七　から衣きしもせぬ夜のなかめこそ拠もわすれぬ妻と成けれ
（一行分空白）」13ウ

元久元年十二月八幡卅首御会

春

一四〇八　八はた山みねのかすみのうちなひき春にもなりぬ明ほのゝ
空

一四〇九　霞たち木のめ春風ふくからに消あへぬ雪に花そうつろふ

一四一〇　うちなひき春やたつらん吉野山やまもかすめるかせの音哉

一四一一　難波かたあし火たくやの春のそらくゆる煙にたつ霞かな

一四一二　春ふかみ花に山風ふくまゝに吉野ゝまつにかゝる白雲

一四一三　とはれてや春もくれなん御芳野のはなちる庭の有明の月

夏

一四一四　春くれて一夜ふしみの明ほのにをはつせ山の夏をみるか
な」14オ

一四一五　我宿の軒の楢に夏はきてもりえぬ月の影そさひしき

一四一六　郭公こゑのよすかとなるものはなきつる雲のむら雨の空

一四一七　村雨のつゆの名残をならのはに残。てみかく夏のよの月（し）

一四一八　夕たちのまたはれやらぬ山のはにをのれさやけくとふ螢哉

一四一九　かせのをとも立田のもりになく蟬の羽にをく露も秋を待ら
し

秋

一四二〇　秋はきの上はつれなくをく露にやとれる月のかけそうつろ
ふ

一四二一　さをしかの涙はみえぬ夕まくれほしえぬ袖の露をからなん

一四二二　とまをあらみ露そたもとにをきゐつゝかりほの廬も月をみ
し哉

一四二三　たれみよと露のそむらんたかまとの尾上の宮の秋はきのは
な」14ウ

一四二四　露のをくとてこそぬるゝ袖のうへをあやしと月を影（の歟）やとす
らん

一四二五　かねの音にけふもくれぬとなかむれはあらぬ露散袖の秋風

冬

一四二六　神無月もみちになりぬ立田山三室の時雨日数ふるらし

一四二七　冬はまたあさちかうへにふる霜の雪とそまかふ明方のそら（かとイ）

一四二八　木の葉しく山下水の薄氷ひとへにあきをむすふ也けり

一四二九　網代木にいさよふ浪やこほるらん千とり吹よるうちの川風

一四三〇　冬さむみよし野の雪のさえ〳〵てくもるも知ぬ山のはの月
とをさかり波も音せすさよふけてこほりをわたるしかの山（るイ）

一四三一　風

雑」15オ

一四三二　から衣袖しくうらのかちまくら枕の波に千鳥をそ聞
一四三三　たひの月清見か浦にやとからん浪の関守うちもねなゝん
一四三四　都たにさそなさひしき松のかせひとりみ山にたれ忍ふらん
一四三五　風すきゝつる旅の哀をかすゝにいかて都の人とかたらん
一四三六　草枕もとより露はをく物をあらぬすちにや月もすむらん
一四三七　いはし水きよき心をみねの月てらさはうれしわかの浦風

（一行分空白）

同月賀茂上社三十首御会

春六首

一四三八　賀茂山のふもとのしいの春かせに御手洗河の氷とくらし」15ウ
一四三九　二見かた春のしほやのよはの月煙いとへはかすむ空かな
一四四〇　たてなから三世の仏にたてまつる花かもおるな春の山人
一四四一　さとはあれぬしかの桜の木のもとに昔かたりの春風そ吹
一四四二　いそのかみふるの山おろしいくへの春のはなさそひきぬ
一四四三　花ちりぬ石ゐの水のしゐてなを春をとゝめよしかの山かせ

夏六首

一四四四　郭公をのか五月を松のかせふくかときけはむらさめのこゑ
一四四五　時鳥まつ夜なからのうたゝねに夢ともわかぬ明かたの声
一四四六　なかむれは槇の木のまに月さえてみ山はまたき秋かせそ吹
一四四七　夏ふかみ月まつよはの山のはに光をならす庭のいな妻」16オ
一四四八　夏ふかみ木たかき松の夕すゝみ楢にこもるあきの一声
一四四九　夏と秋と行かふ夜はの浪の音のかたへすゝしきかもの河風

秋六首

一四五〇　心すむためし也けり千早振かもの川原のあきの夕くれ
一四五一　羽にかくるとこよの雲やくる雁の都の月のくまと成らん
一四五二　新古野原より露のゆかりをたつね来て我衣手に秋かせそふく
一四五三　すゝむしのこゑ古郷のあさちふによすからやとる秋の月哉
一四五四　秋かせも身にさむしとや蚤くるゝ夜ことに声うらむらん
一四五五　今こんとたのめし庭に露さむし有明方の長月の月

冬六首」16ウ

一四五六　吹まよふ木の葉にいろや残るらん昨日くれにし杜の秋風
一四五七　紅葉はも今はあらしの日影へてみ山あらはに冬は来にけり
一四五八　おりくふる柴の煙の絶〳〵に麓の風にむすほゝれゆく
一四五九　庭の雪もふみ分かたく成ぬ也さらても人を待となけれと
一四六〇　さゝのはゝみ山もさやに置霜のこほれるにさへ月はすみけり
一四六一　宮こ人とはて月日は杉のはに雪のみふかきをのゝ山もと

雑六首

一四六二　賀茂山や山吹かせはのとかにて神のちかひもたのもしのよや
一四六三　都にはたゝくもらすと月はみるとすましやまきの木の間もる影
一四六四　山里はみねの嵐にねさめして思へはそてにしのゝめのつゆ」17オ
一四六五　海山もたひの枕のねさめには松風よりそ袖はぬれける
一四六六　山寺のけふもくれぬのかねの音に涙うちそふ袖のかたしき
一四六七　みたらしや神のちかひを聞おりそなをたのみある此世也け

一四六八　榊ふくはつ春かせにさそはれて千世をこめたるうくひすの
　　声
一四六九　春のきておろすあらしはさゆれ共霞そいそくあまのかく山
一四七〇　芳野山春たつみねのかすみより今年ははなとふれる白雪
一四七一　故郷の春やむかしの軒はより月にかほれる梅のはつ花」17ウ
一四七二　春のきてあけゆく山のむら霞おほろにのこるよこ雲の月
一四七三　みかりせしすそのゝ雪におもなれて春の桜にきゝす鳴也

　　夏六首

一四七四　けふよりや山をかすみの立はなれいなはのみねの夏の曙
一四七五　山のはに月そ朧の夏の雨にひとりさやけき郭公哉
一四七六　在明の月の行ゑをなかむらし山のはかこつ時鳥かな
一四七七　羽衣のうすきにすらん夏の夜は月影よりそ秋はおほゆる
一四七八　一こゑの名残はさても有明の難面みゆるほとゝきす哉
一四七九　わきも子かやとのさゆりの露さむみかせよりさきの秋の夕
　　くれ

　　秋六首」18オ

一四八〇　月影もまたこん比をたのむなりいなはの山の秋の初かせ
一四八一　大方の秋とはしらてなかむともしるくもあるへき袖の露哉
一四八二　天の川雲のしからみ浪こえて露所せき秋のそて哉
一四八三　里からの秋とはことになかむとも宮もわらやも同し夕暮
一四八四　いとゝしく袖ほしかたき故郷に露をきそふるあきの村雨
一四八五　誰ね覚とふ共わかぬかせの音も秋はならひの床の白露

　　冬六首

一四八六　山かつの冬くるからにたきすさふしは〳〵くもる初時雨か
　　な
一四八七　白露も時雨もいたく故郷は軒の木末もこさまさりけり
一四八八　立田山ふゆのあらしは雲なれや木の葉の雨の五月雨のこ
　　ろ」18ウ
一四八九　きのふかもいなはもそよの秋の風み山の松の雪はふるなり
　　をまくイ
一四九〇　さ庭に衣かたしき月をのみまつの木の間そ冬もかはらぬ
一四九一　うきねもるかものつはさにをける霜かさぬるからにさゆる
　　毛衣

　　雑六首

一四九二　淡路かた波まの月を吹しほれうらこくふねのあとの塩かせ
一四九三　から衣きつゝ馴にしあとふりてけふそ三河のぬまの八はし
一四九四　村雨の音になれたるすまひかな月すむよはも庭の松風
一四九五　山里はみはてぬ夢もしはしこそ住なれぬれはすみうからぬ
　　を
一四九六　世中はあるにまかせてふるさとの袖もまかきも同し白露
一四九七　あしのやのなたの塩くむあまの袖ぬるれはとてや月もすむ
　　らん」19オ

　　同月住吉三十首御会

　　春

一四九八　いくとせの初春風になれぬらんみてたに久し住よしの松
一四九九　さえむすふ春の池水隙もりてこほりのうへにさゝ浪そたつ
一五〇〇　つま木こる谷の北かせ吹かへてけふよりはると人にしらる

ゝ

一五〇一　あはち島浪におちぬるあかつきのくもらてあくる有明の月
一五〇二　八重かすみけふりもみえす成ぬ也ふしのたかねの夕くれの
空
一五〇三　わが身よ(風)にふるの山辺のやま桜うつりにけりな詠せしまに
夏
一五〇四　さゆり葉の葛城山のみねの月暁かけて影そすゝしき」19ウ
一五〇五　夏のよはをしかのつのゝつかのまにやすらふ月のあくる山
の端
一五〇六　すかはらやふしみの山の郭公木のまの月にきつゝ鳴なり
一五〇七　雨そゝきかた山をのゝさなへとき引しめ縄にかはつ鳴也
一五〇八　夏ふかき鳥羽田のいなは露落てまたほにいてぬ風渡る也
一五〇九　ほの〳〵とうきたる船のいかならん夕たつ波のあらき浦か
な
秋
一五一〇　露しけき袖をたつねて秋の来はよそにはきかし荻の上風
一五一一　たか秋の物おもふやとに吹なれてわか袖かこつ荻のうは風
一五一二　松かせに夢のうきはしと絶してたひねよふかき秋のよの月
一五一三　難波かたしほせ(相似御製入新拾遺少相違)の波を吹かせにあしのはそよく秋の夕く
れ」20オ
一五一四　なかめ行心の色の初もみちいつれの山のしくれそむらん
一五一五　峯の雲まきのお山にふくあらしふせ(か本ノ)。ぬ(ふけぬイ)やとかせうちの里
人
冬
一五一六　秋はつるうらみは今朝(よイ)そきり(はイ)〳〵す頼むよもきふ霜さえぬ
也
一五一七　山ひとのとやまの袖や時雨らんたかねのくれに雲のかゝれ
る
一五一八　御吉野のさとのね覚の床さえてけさまつしろし雪の下風
一五一九　さひしさに煙をたにのけふり行外山のしはにかせすさむ也
一五二〇　今朝きたるをのゝ里人ことゝはん都(みやこイ)のかたの雪はあさしや
一五二一　たつた山しくれはそむるあとにまた紅葉ふきかへす凩の風
雑」20ウ
一五二二　あらし吹しのやの月に思ふかな都もかくや夜さむなるらん
一五二三　月ゆへになれしをしのふ人やあるとやすらひかねてあくる
山のは
一五二四　いつのまにむかひの岡の小松原月もるまてに成にけるかな
一五二五　何事を思ふ人そと人とはゝなしとやいはんいかゝこたへん
一五二六　山ふかみとはぬならひをうち忘雲のはたてになかめわひつ
ゝ
一五二七　我かくて世に住吉のうらかせをたのむこゝろは神のまに
〳〵
（一行分空白）
同三年三月日吉三十首御会
春
一五二八　春来ぬと聞つるやまのかひなれやかすみてすくる峯の松か
せ(新古)」21オ
一五二九　ほの〳〵と春こそ空に来にけらし天のかく山霞たなひく
一五三〇　春はなをあさつま山をいつる日に波立そむるしかのから崎
一五三一　よしの山春そ白雲霞つゝ花咲けなるみねのいろかな

一五三二　あかつきのこれもならひのわかれそと難面みえてかへる雁
かね
一五三三　をしなへて花と雲とをさそひけりなからの山のみねの春か
せ
夏
一五三四　かた岡のもりの木陰に立ぬれてまつともしらぬほとゝきす
哉
一五三五　玉かしはたま〳〵はるゝ五月雨の雲まの月の影をしそおも
ふ
一五三六　ほの〳〵と有明の月をまち出て山郭公ひとりなくなり
一五三七　すなはらやふしみの里に来鳴なりわか世やへつる山時鳥」
21ウ
一五三八　夏の日のもりくるからに涼しきは山たのはらの杉の下かせ
一五三九　六月の一むらすくるよひの雨におほえて月のたけにける哉
秋
一五四〇　しかの浦に釣するふねの蜑の袖今朝吹かへすうらの秋かせ
一五四一　大かたのならひかさとのそての露猶ふか草のあきの夕くれ
一五四二　物おもふたれになれたるあきかせのたゝ大方の袖にふくら
ん
一五四三　忘なん中〳〵の荻のうはかせと思ひすつれと秋のゆふくれ
一五四四　。曳足の山たもる庵のとまをあらみ木の下露や袖にもるらん
一五四五　なかむれは涙しくれとふる里におもひもいれし秋のよの月
冬」22オ
一五四六　冬にいまはなるみのうらのうつせかひうつれはかはるなみ
の音哉
一五四七　新古ふかみとりあらそひかねていかならんまなく時雨のふるの
神杉
一五四八　同冬の夜の長きをゝくる袖ぬれぬあかつきかたの四方の嵐に
一五四九　なかむれはかり田の雪にゐる雁の友呼こゑのさむき明ほの
一五五〇　冬ふかき草のはらなる霜の上にいとゝさひ行かせの音哉
一五五一　冬きても空たのめなるみとりかないつらときはの杜のこか
らし
雑
一五五二　神のちかひかはらぬ色を頼かなおなしみとりのからさきの
松
一五五三　よをいとふ吉野のおくの柴の廬にあかすも咲る山桜哉
一五五四　すまの関かよふ千とりもうち侘ぬいたくなみにィなふけそ有明の
月」22ウ
一五五五　新拾さらぬたに宮古恋しき東路になかむる月のにしへゆくらん
一五五六　いにしへの人の心に居歟ゐしせきはいつれの世より跡絶にけん
一五五七　統千見すしらぬむかしの人の恋しきは此世をなけくあまり也け
り

（注1）実際は後二条院の百首であり、有吉保氏・田村柳壱氏「『後二条院百首』（仮称）―翻刻と紹介」（『語文』（日本大学）第五二輯・昭和五六年六月）に翻刻・紹介されている。

（注2）前掲論文の伝本紹介に「本来は六八丁と六九丁との間に位置すべき（中略）一丁が、上冊最末尾に誤綴されている」と指摘されており、誤綴されていた時期があったようであるが、現状ではこの位置に綴じられている。